



私は、言語聴覚士として耳鼻咽喉科医師の指示の下で補聴器外来に携わってききました。歳をとるにつれて小さな文字が見えづらくなるように、耳の聴こえ(聴力)も加齢により衰えます。そのような自然な聴力の衰え(加齢以外に明らかな原因がみられない聴力の低下)の場合、耳鼻咽喉科医師により老人性難聴と診断されています。補聴器外来において老人性難聴の患者と接する中で私自身が学んだことや患者からの質問を紹介します。

①補聴器を必要とするのは誰なのか

聴力低下をしている本人が補聴器を必要とすることは当然ですが、一方で、家族が「本人に補聴器を使用してほしい」と願っていることも少なからずあります。家族の訴えは、「テレビの音が大きすぎて一緒に見られません」「大きな声で話

すと、とても疲れます」「大きな声で話すと怒っているようになってしまいい、辛いです」などでした。本人は「家族が大きな声で話してくれば不自由がないので、補聴器は必要ない」と言っていました。このような場合は、家族と本人がお互いの気持ちに歩み寄りながら補聴器の必要性について相談していきました。補聴器は装用する本人のためだけでなく、家族のためにもなるのだと感じました。

②補聴器は何年使えるのか

補聴器を試してみたいと言われる患者の多くが、補聴器のことを「一生もの」だと思っているようでした。しかし、補聴器は器械的な

で、水に弱く、劣化も故障もします。福祉サービスでの補聴器(補装具)の耐用年数が5年なので、これが補聴器使用期間の1つの目安になるかもしれません。しかしながら、上手に丁寧に1つの補聴器を10年以上も使用している方も多くみられました。

③補聴器購入までの流れ

敬老の日のプレゼントとして、家族が補聴器を購入し、本人に手渡すことが以前はよくありました。しかし、補聴器は本人の聴力に合うものを装用しなければならぬため、現在では本人抜きで購入することはほとんどなくなりました。補聴器の購入は、耳鼻咽喉科を受診して聴力などを測定し、医師に補聴器が必要であるかを判断してもらうことが大切です。そして、補聴器を借りて生活の場での試験期間をもつことが大切です。私が所属していた補

聴器外来では、医師による補聴器必要性の判断から補聴器購入までの期間が約2カ月でした。1〜2週間、家庭や外出先で試験してもらい、再来院時に患者からの報告をもとに補聴器を再調整して、また家庭で1〜2週間試験してもらいます。これを数回繰り返して、本人も家族も補聴器装用について納得し、補聴器使用の見通しが立ったときに初めて補聴器業者からの購入となりました。

④補聴器の限界

補聴器はさまざまな難聴に必要とされますが、若い頃の耳に取って代わるようなものではありません。聞きたい音だけ聴こえるようになるわけではありませぬし、うるさく感じることもしばしばです。補聴器の限界を知って、賢く購入・使用することが大切です。



大学図書館へようこそ！

大学では後期の授業が始まりました。3・4年生は実習も多くなり、同時に国家試験や卒業論文に備えて大変忙しい時期を迎えます。それに伴い図書館も多くの学生で賑わっています。



◀開館時間のお知らせ▶

9:00~21:00 ※日曜・祝日は休館

◆問い合わせ

名寄市立大学図書館 ☎01654②4199(内線4201)

大学図書館にはこんな本があります

～～高齢者の聴覚や補聴器に関する図書～～

- 『イラストでわかる高齢者のからだと病気』
すぎやまたかひろ 杉山孝博/著 中央法規
- 『補聴器の必要な人、不要な人』
かんざきじん 神崎仁/著 医学と看護社
- 『身ぶり手ぶりで楽楽コミュニケーション 介護に役立つシニアサイン』
さいとうあやの 齋藤綾乃/著 中央法規
- 『人生の途中で聴力を失うということ』
キャサリン・ブートン/著 ニキリンコ/訳 明石書店